

R18



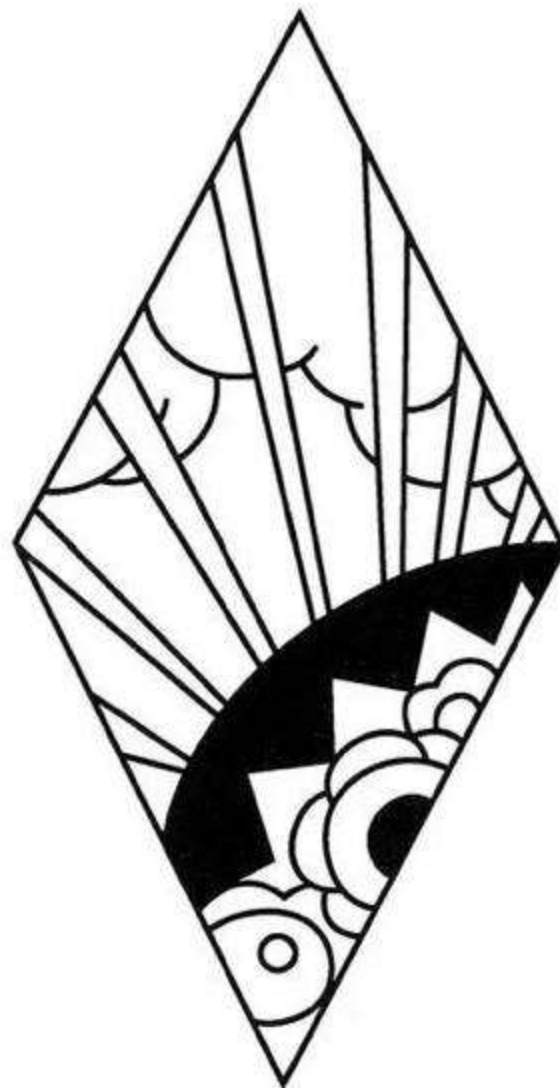
UTANO PRINCESSAMA CAMUS*HARUKA

CANDYTUFF

BY G.A & PEZ. SPRING 2015

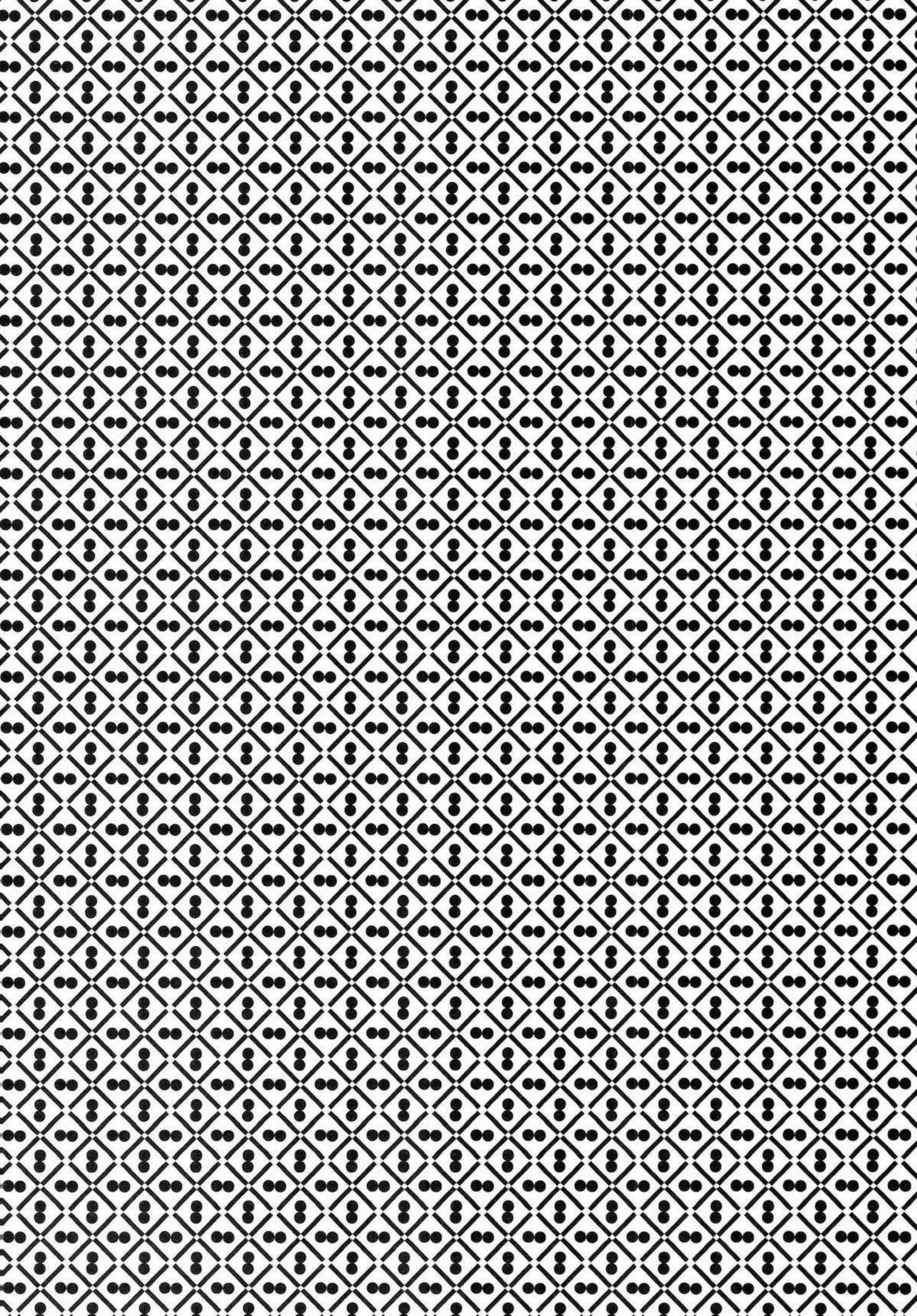


KONNYAKU YUKKO & USA PRESENTS



Candyfest

UTANO PRINCE SAMA
CAMUS' HARUKA FANBOOK
SPRING 2015



明日は
ホワイトデーだろう。

夕方には
帰るようにするから、
お前も空けておけ。

こっそり
楽しみにしてしまう
私がいいます

おはようレディ
バロン、起きてる？

お早うございます
神宮寺さん

いつも
ありがとうございます

今日は
すごい荷物
ですね？

ああ、
これはね、き...

おい
神宮寺

昨日、先輩はそう言って
微笑んで下さったので

どっさり







お前…
顔が赤いぞ

ふいっ
さっき
頂いたみるふいーゆを
食べてから

ずっと
ぽかぽか
してるんです♡



春歌…?
寝ているのか?

はたはた



この匂いは
オレンジリキュール
コアントロ……



はあ
全く…
菓子で酔うやつが
あるか

ふんっ



くりすちゅー♡

ふんっ

お帰りなさい♡

お帰りなさい♡



そんな
蕩けたままで
いらっしやると

WDをずっと褥で
過ごすことに
なりますよ？



…なんてな

ホットミルクでも
作ってやるから
飲んで横になっという

今日は
俺が夕食を
作って…

いいです

…は？



一緒に
居て下さい
クリスマスザード…

…途中で
酔いが覚めても
止めてやらんからな







ここか？

とん！

とん！

あ♡

ここを
突かれるのがっ

そんなに
好きか…ッ♡

初心な小娘
だった癖に…！

すっかり
交尾に夢中にな
りおって…ッ♡

びびっ♡

おっ

31
31

おん♡

おん♡

ア

グッ！

お♡

ッ！

ギン！

ギン！

グッ！

グッ！





俺の全てが
欲しいの
だろう…ッ？

おかひく
ないや…ッ♡

まっ♡♡
まっ♡♡♡♡♡♡♡♡

あ♡

さっ♡

さっ♡

さっ♡



素直になった
褒美だ…♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

一番奥に…ッ
種付けてやる…♡ッ！

め♡♡
SONG♡
SONG♡

春歌のなかに♡
びゅ♡♡♡♡♡♡♡♡

春歌で
気持ちよくなった
しるし…♡♡

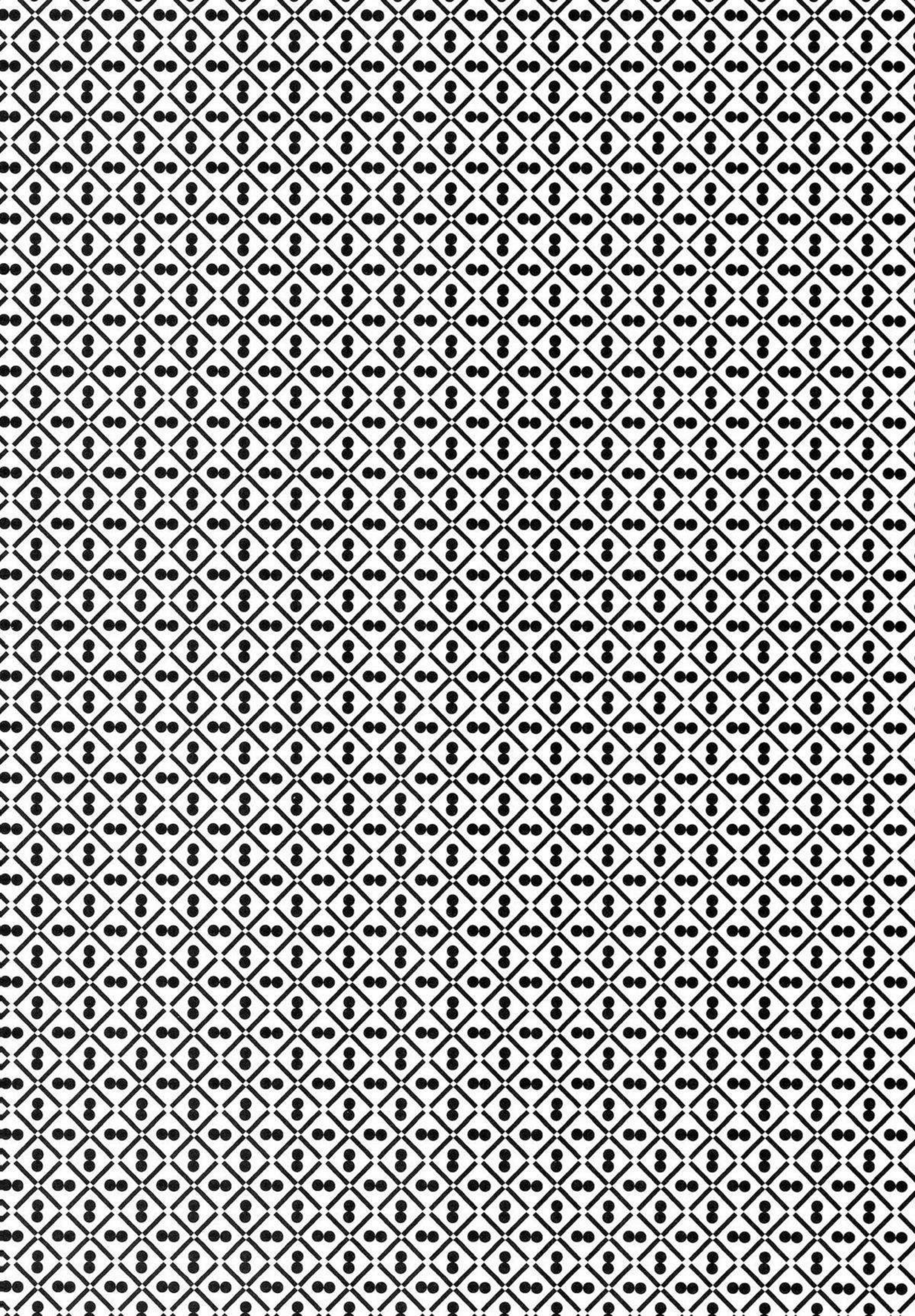
いっぱい
くらひゃ…♡♡♡♡

あ♡

♡♡







Chéri Chérie

「お嬢様」

呼ばれたような声に、春歌は洗濯物を干していた手を止めた。

振り向いて見ればカーテンが風に揺れているが、声の持ち主の姿が見えずにきよとんと首を傾げる。

もしかしたら空耳だったのかもしれない。そう思い、最後のシャツを手に取ったそのとき、もう一度今度は低い音が鼓膜を揺らした。

「ここに居たのか。もう終わりそうか？」

ふいに背後から声がして、振り向くとカミュがベランダの入り口に立っていた。いつも通りの口調に、やはり最初に聞こえたのは気のせいだったと春歌は思う。

カミュが仕事のために使う音色は時折この家でも聞くことがあったが、ほんの気まぐれで発せられるそれはそうあることでも無かった。

「あとこれ一枚だけなので、もう終わります。何かあったのですか？」

「いや……終わったら居間へ来い。話はそれからだ」

言うだけ言ってカミュはその場を後にする。意味深な言葉にきよとした春歌はカミュの背中を見送っていたが、来いと呼ばれた為ハンガーを取り、大きなシャツを手早く物干し竿に吊るした。

洗濯かごを抱え、急いで脱衣所に戻り、片付けも早々にそのまますぐにカミュの待つ居間へ向かう。

階段から顔を出すと食卓のテーブルの前にカミュが立っていた。春歌は急ぎ足でその場へ近づく。

「カミュ先輩、お待たせしました。どうかしましたか？」

「……ふむ」

「先輩……？」

すぐ傍で春歌はカミュを見上げる。すると用があるらしいカミュは同じように見下ろして来て、何かを考えるように顎へ手を添え、低く喉を鳴らした。

「着替えて来なかったのか。まあ俺も何も言わなかったが……」

「着替え、ですか？ このままではいけなかったでしょうか……あ、もしかしてお出かけですか？ でしたらすぐに……」

「いや、よからう。さほど気にすることでもあるまい」

今日は二人とも二日オフだった為、春歌は朝から家事に精を出していた。

いつものように、以前カミュから与えられた給仕用の衣服を纏っていたのだが、カミュの物言いからいけなかったのかと首を傾げる。

この格好で何かまずい事があるとするならば、外出することくらいしか思い浮かばなかった。しかしどこかへ出かけるのかと思ったがそうでは無いらしい。

はつきりした事を告げないカミュに春歌が益々困惑してしまうと、ふいに手を伸ばしたカミュは春歌の腰に自然な仕草で手を添えた。

「とりあえず座れ。寒くはないか？」

「は、はい。大丈夫です……。あの、先輩……」

確かにまだ完全に暖かい季節では無いが真冬でも無く、特に今日は心配されるような気温ではなかった。気を使っているようなカミュの言動はまだ真意が読めない。

それでも大きな手に促されるまま、ソファへ腰を下ろすとカミュはすぐにまた何処かへ行ってしまった。

よくわからないことだらけで春歌は戸惑いを浮かべる。カミュは気まぐれな所があるのはよく知っているけれど、こうしてはつきり物を告げられないことにはただ従うしかできない。

そう時間も経たない内にカミュは戻って来た。手には皿が二つあり、そういうえば姿を消した方向がキッチンだった事に気づく。

近づくにつれ良い香りが漂い、優雅な仕草でテーブルに置かれたのは綺麗に

盛り付けされたサラダとスープで、見上げるとカミュは小さく咳払いをしてからにつこりと微笑んだ。

「お嬢様、ランチタイムにございます。僭越ながら本日はこのカミュがご用意をさせていただきますました」

「えっ……か、カミュ先輩？」

驚いて春歌は目を見開く。いつもよほどの用がない限り、この家で料理をするのは春歌の役目だった。それに、カミュの口調と柔らかな音色。

何の意図があつてのことなのかはわからないが、その時春歌は先程ベランダで聞いた声が聞き間違いではなかったのだと気付いた。

「どうぞ、お召し上がりください。メインはクリームソースのパスタでございます。前菜を食べ終えましたらお持ちいたしますので」

「あ、ありがとうございます……あの、突然どうしたんですか？ わたし特に忙しくも……」

「今日は特別な日ですので。この後のことは全て私にお任せください、お嬢様」ふと柔らかな笑みをカミュは浮かべる。特別な日、そう言われて一体何かあつたのだろうか？と春歌は考える。

三月といえば、一番最初に思い浮かぶのは歌謡祭で優勝をし、同時にシルクパレスを二人で救った月だった。けれど日付がもつと違うことはすぐに解り、それから他に何かあつただろうか。

今日は何日だっけ、と思い返し、はたと気づく。思わず小さく声を出してカミュを見ると、思案する春歌を眺めていたカミュは嬉しそうに口元を緩めた。

「お気づきになれましたか？」

「もしかして、ホワイトデーですか？ だからこんな……」

「ええ、バレンタインはお嬢様に深い愛情をいただいたので、本日はこのカミュにそれ以上のお返しをさせてください」

やつと告げられた真意と、少し恥ずかしい言葉に春歌は頬を染めて俯く。食事を留意させてしまったのは申し訳ないと思うが、カミュの気持ちに純粋に嬉しくて思わず唇を噛み締めた。

バレンタインは渡す事ができるだけでも幸せだった。けれどわざわざこんなお返しを考えてくれていたなんて。

ちらりとカミュの顔を見ると、そつと手が伸びてきて髪に触れる。

「さあ、早く召し上がってください。スープが冷めてしまいます」

「ありがとうございます……あの、カミュ先輩の分は……」

「私のことはお気になさらず結構です。今日は貴女の為の日ですから」

「えと、お気持ちは嬉しいです。でも……できればご飯と一緒に食べたいです」

その方がずつと美味しいですから、と付け足すと、カミュは撫で付けるように春歌の頭を撫でてからふつと笑みを零した。

「やはり、お嬢様ならそう仰ると思いました。今すぐ私の分も持って参りますので、一緒に一緒に食べてもいいですよ、よろしいですか？」

「はい、もちろんです！ あの、お手伝いできる事があつたら何でも言つてください」

立ち上がったカミュはぽんぽんと春歌をあやすように触れてから、キッチンへと向かった。

着いていくべきかと一瞬迷つたが、きつとそうしない方がいいのだろうとその場でじつと待つ。

湯気の立つスープからはいい香りが漂っていて自然と顔が綻んだ。カミュが料

理をしている姿を見る事ができないのは残念に思うが、傍にいらるときつと手伝いをしたくなってしまう。

朝、洗濯を任されたのは、春歌が自分の汚れ物に触れて欲しくは無いと知つてのカミュの配慮に違いなかった。いくらカミュと言えど肌着を扱われるのは流石に抵抗がある。

きつと今日、カミュはこの後の家事をしてくれるつもりなのだろう。

そこで春歌はやつと、カミュが給仕用の衣服について指摘してきた意味に気づくことになった。

*

それから告げた通り、カミュは執事のように家の事をこなしてくれた。

昼を済ませた後、何かしたいことを聞かれ、アレキサンダーと庭で思い切り遊んだあとに、久しぶりにチェロの演奏をお願いすると快く応えてくれる。

春歌もピアノを弾けば夢のような時間はあつという間に過ぎ、午後三時を回つた所で二人は再び居間のソファに並んで腰を下ろしていた。

「いかがですか？ お嬢様の好みに合わせて茶葉を選ばせていただきました」

「とっても美味しいです。あの、ありがとうございます、こんな至れり尽くせりで……」

「とんでもございません、全てはお嬢様の為、私がそうしたいからしている事ですから」

「演奏も、とっても楽しかったです。こんな贅沢していいのか少し不安になってしまいます」

ふふ、と春歌がはにかむとカミュも穏やかな表情を浮かべる。

普段ならばどんなに春歌が仕事で忙しくとも、家の何もかもをカミユ一人に任せてしまうのは気が引けて甘えることはできなかった。

しかし今日はカミユが特別な日と言った通りに、いつもはできないことをしてもいいのだという思いが春歌にも芽生えていた。特に何でもこなせるカミユの手料理を振る舞われるのは嬉しい。

味付けも好みに合わせてしてくれているのがわかり、全てが自分のためだと思つと幸福感がじわりと生まれる。

並んだケーキや焼き菓子に少しずつ手を伸ばしながら、他愛の無い会話をする。アレキサンダーは遊び疲れてしまったのか、専用のベッドで丸くなっていた。ゆつたりと過ぎる時間はいつもの日常と何ら変わり無いはずだが、何だかとても贅沢なことをしているように思えて不思議な気分だった。

「さて、お嬢様。他に何かお望みはございますでしょうか」

「望み、ですか……？ いえ、もう充分すぎるほどいろいろしていただいたので……」

「そのようなわけにはいきません。どうぞ、何とでもお申し付けくださいませ」
相変わらずカミユはその態度を崩すことはない。始めはくすぐったかった口調もそろそろ慣れてはきた。

望み、そう言われても今だって充分すぎると思つていたくらいだったのに、問われて困つてしまう。

少し俯いて、春歌は顎に手を添え考える仕草をしていた。それを見てカミユは気付かれないようにふむ、と唸る。

単純に何かを求めたところで、この消極的な少女がすぐに答えを出すとはカミユも初めから思つてはいなかった。それが春歌らしいと言えはそうでしかな

いのだが、カミユとしては今日は尽くすと決めたのだから貫きたい。
かえつてそれが春歌にとつては困惑してしまうものだとしても、もう家政婦ではない彼女に普段どれほど世話になつていのかは計り知れない。

考え込んでしまったらしい春歌は難しい顔をする。きっと相手の負担にならないようなことを必死で考えているのが手に取るようにわかり、カミユは先に思いついていた事を口にした。

「…では、もつと甘えてみる、というのはどうでしょうか？」

「えっ……甘える、ですか？」

「ええ、今日は随分お嬢様に甘えていただき、こうして料理や紅茶も振舞うことができました。なのでその延長と考え、私に甘えてみてはいかがでしょう？」
こういふときカミユはすらすらと饒舌に言葉を紡ぐのが得意だった。仕事で自らの意見を通すときのように、目の前の彼女へ提案したそれ。

しかし、きよんとする春歌はよく意味を理解していないようで小首を傾げてみせる。

「えと……具体的には、どういう……」

「説明が足りませんでしたか。甘える、というのはそのままの意味でございます。お嬢様、こちらへ」

あくまで淡淡とした態度を取りながら、カミユは軽く腕を広げてみせた。やつと顔を上げた春歌もその動作を映す。

さあ、と付け足され、春歌はカミユをじつと見つめる。上手く状況を飲み込めないでいると、カミユはすつと目を細めた。

「お嫌ですか？」

「え、あの、すみません。わたしは何をすれば……」

「何、とは……お嬢様と私は恋人同士です。甘えていただけなのであれば、私の腕の中へ来てくださいませんか？」

少しだけ低く、喉を唸らせるように言葉を紡ぐ。誠実さを覗かせながら告げると、春歌は一瞬ぼかんと口を薄く開けた。

それから唇を噛み締めて、じわりと頬を赤く染める。想像通りの反応ではあったが、カミユは構わずに微笑んでみせる。

「お嬢様、お嫌でしたら構いません。このカミユを不躰だと言って切り捨ててください」

「そ、そんな……嫌では、ないのですけれど、その……」

「お恥ずかしい、ですか？　けれど誰に見られる訳でもありませんので、気になさらず結構ですよ」

先回りして話を進めて行く。多少強引なくらいが互いに都合がいいと充分にわかっているからこそ、カミユは態度を崩さず手を伸ばす。

膝の上で握りしめられていた手へそつと触れると、春歌は少し恨めしそうな顔をしてカミユを見た。

「先輩は、ずるいです……」

「おや、何故でしょう？　そのようなつもりはございませんが」

「……そ、そちらへ行つても、よろしいでしょうか……」

床に視線を落としながら、春歌はもごもごと口を動かしたが言葉はしつかりとカミユへ届いた。存外素直なそれにカミユは思わず口元を緩める。

普段春歌は自分から触れ合いを求める事は全くと言っていいほどに無かった。ほんの少し頬へ触れるだけでも真っ赤になつてしまふくらい恥ずかしがりの彼女に、それは無理な事なのかもしれない。

しかしカミユが手を伸ばせば、愛おしそうに擦り寄つて来る仕草はまるで猫のようだった。恐らく春歌自身無意識なのだろうが、嬉しそうに表情を綻ばせる様子が可愛らしくて何度見ても飽きない。

だからこそ、時折彼女から垣間見る控えめな合図がひどく愛おしいと思う。カミユにとつて願つてもみないそれは、例えこうしてシナリオに沿ったものだとしても特別なことに思えた。

小さな手を握り、静かに引くと春歌はゆっくり腰を浮かせる。立ち上がった彼女を前に、カミユが脚を開き促すと、小さな体はすつぱりとカミユの元へ収まつた。

「お嬢様、そのように緊張なさらずもつとこちらへ」

「は、はい……あの、重かつたら言つてください、ね？」

遠慮がちに春歌はカミユの胸へ背を預ける。後ろから抱きかかえる格好になり、近づいた距離に春歌の体温が滲んだ。

いつもより高い気がするのには赤く染まりきった耳の所為だろうと、見下ろしながらカミユは思う。ぎゅつと腹を引き寄せ、指先を絡ませれば春歌もそつと手に力を籠めた。

「お恥ずかしいですか？　鼓動が少し早いようです、お嬢様」

「い、言わないでください……」

「これはこれは、申し訳ありません」

ぴたりと密着した体からは春歌の全てが伝わってくる。とくとくと高鳴っているそれに思わずふつと笑えば、吐息で細い髪が微かに揺れた。

握った手が汗ばんでいるのが緊張を教える。しかし、表情は見えないがしばらくして安心したように息を吐く仕草が愛おしいと思った。

静かな声で他愛のない会話を続ける。声の振動まで感じる距離を味わっていると、ふいに春歌は会話を切った。どうしたのかと思い、カミュが覗き込むと見上げてきていた視線と二瞬だけ目が合う。

すぐに逸らされてしまった瞳に問いかける。すると春歌は少し言いにくそうに口を開いた。

「あの……今日はずっとそのままなのですか……？」

「そのまま、とは？」

「お仕事のときのお話し方です……」

突然の指摘は少し想定外だった。特に気にされていないものだと思っていたが、春歌の口ぶりからすると気にはなっていたらしい。

確かに日常でカミュが仕事のときの振る舞いをすることはあまり無い。絶対服従を掲げた時にどちらがいいかと尋ねたら、春歌もいつもの方が良いと言ってくれた為、基本的にこの家では素のまま過ごすのが当たり前になっていた。

以前どちらもカミュであることに変わりはないと告げていたが、恐らく春歌にとつては初めから仕事での振る舞いの方が違和感があるのだろう。

仕事というよりは陛下へ接する態度ではあるが、やはり優しい口調は慣れないらしい。

「こちらの私はお嫌いですか？」

「え、あ、いえ、嫌いという訳では無いのですが……」

「どちらの私も貴女にお使える私に変わりはありません。ですが、貴女が有望みなでしたら……」

「……では、いつもの先輩に戻ってくれますか……？」

控えめな声は申し訳ないと思っているのだろう、春歌はちらりとカミュを見

上げる。

首を逸らして見つめてくる瞳に、浮かべていた笑みを崩してカミュは目を細めた。

「お前は変わっているな、お嬢様と傅かれ、喜ばぬ女などいないと思っていたのだが」

「でも、わたしはいつもの先輩が先輩なので……それに、ずっとだと疲れてしまいませんか？」

「そのような事はないが、お前がこちらが良いと言うならば俺はそれに従おう」

「そうですか……」

折角従ったというのに春歌は煮え切らないような言葉を零す。どうやらカミュを思つての願いでもあったようで、あくまで自分がどうこうしてほしい訳では無かったことにカミュはため息を堪えた。

何故ここまで他人を主体に物事を考えられるのか、不思議に思うときもあつた。カミュも陛下は勿論、春歌には命を捧げても惜しくはないと考えてはいるが、それ以外にそれほどまでの感情があるかと言えばよくわからない。

とにかく彼女は自分以外のことに気をかけすぎな所がある。性格と言つてしまえばそれまでだが、今日だって思い返せば結局は全てカミュがしたい事に付き合ってくれているだけだと気付いてしまった。

ふむ、とカミュは唸る。どうにかして春歌のして欲しいと願うことをしてやりたい。家事も、手料理も、演奏も当たり前前に喜んでくれた。残るものといえば、恋人として何かできる事は無いだろうか。

もう優雅に言葉を紡がずとも良くなったため、春歌を抱いたまま顔を覗き込む。触れている事に慣れたらしい春歌はじつと身を預けていた。

「春歌、お前は……」

「っ、……」

びく、と肩が跳ねたのはこの距離ではつきりとカミュに伝わった。突然の反応にカミュも思わず言葉を切る。

「一体どうしてしまったのか、窺おうと見下ろすと、春歌は恥ずかしそうにうつむく。」

「春歌？ どうした、何か……」

「い、いえっ、なんでもないです……ちよつと、びっくりして……」

「……？ 何だ、はつきりと言え」

「な、名前を……急に呼ばれたので、びっくりしただけです……」

ただそれだけの事で反応してしまったのが自分でも想定外だったのか、春歌はじわりと耳を赤くした。それから急にもぞもぞと落ち着きなく身を振る仕草にカミュは抱き込んでいた手を緩める。

何故急にそんな事で、と思ったが、考えてみれば今日はずっと優しくお嬢様と呼びかけていた。それに慣れ始めていた所で、低く名前を呼んだ事で驚いたという意味なのだろう。

春歌は耳が良かった。音楽を紡ぎ出すうえで重要なそれは時に過敏すぎるのかもしれない。

ふと悪戯心が湧き、カミュは再び小さな体をぎゅうと抱え込む。

「ひゃっ……！ か、かみゆせんぱ……」

「お前はどちらの俺の方が好みなのか？ 春歌……」

「んっ、ま、待ってください」

「素直に言え、できたら褒美をくれてやる」

逃がさないようにして、耳元に吹き込むように囁く。今度は意識した所為が大袈裟に体を跳ねさせた春歌は、慌てて腰を浮かせようとした。それを逆手に取り、ぐいと体ごとこちらを向かせると泣きそうな瞳と視線が絡む。

そんな顔をされたらやめようにもやめられないだろうと、カミュは上から覗き込むようにして赤い頬を撫でた。

「そら、早く言ってみろ。俺が待てなくなるぞ」

「ああああの、元に戻ってくださいとは言いましたが、これは色々違う気がする」
「そうか？ 嫌ならば止めるが、お前はどうしたい」

「っ、それは……」

すぐ近くで春歌の潤んだ瞳が泳ぐ。この否定も肯定も無い戯れは何度目だろうかとかカミュは目を細める。

結局何も言えなくなってしまう春歌が唇を噛み締めたのを見て、隙をつき頬の高いところへ口づけを落とせばぎゅつと瞼が閉じられた。

続けて額や目尻を唇でなぞって行くと春歌の喉から小さく声が漏れ始める。所作無さげな手を取り、カミュの頬へ添えさせじつと眺めて待つ。

ゆつくりと開いた瞳は困惑しきった様子でカミュを映した。につこり微笑んで、小さく呟く。

「せがんでみろ、お前の望むように何でもしてやる」

「っ……、先輩は、いつもずるいです……」

「言うようになったな？ それで良い、早くしろ」

「……キス、と……ぎゅうって、いっぱいしてほし、んっ……」

言い終える前に開いた唇をはむりと塞ぐ。二応は自ら求めた春歌は素直にカミュの胸元に縋った。頬に触れていた小さな手を首に回させ、遠慮なく口づけ

を深めて行く。

貪るように堪能しながら、結局都合よく自らの思い通りに結末を迎えるこれでは本末転倒だな、と思ったが気にするだけ愚かだとカミユは思うことにした。

*

「んっ、ん……」

籠った吐息を混ぜ合わせながら、腰掛けたベッドが軋む音が濡れた声の合間に響く。居間では大切なもう一人の同居人がいる為、カミユは早々と春歌を寝室へ抱えて来ていた。

夢中で唇を合わせると細い背中がぞくぞくと震えているのが伝わる。舌を伸ばし、唾液が跳ねる音も気にせず睦み合えば荒くなる呼吸に興奮が増えて行った。

片膝に春歌を乗せ、覆い被さる格好で口内をまさぐる。指先で耳たぶや頬を撫でると敏感になっているのか、小さな体は素直に反応を返した。

何度も上下する細い喉は必死に流れ込む唾液を飲み込み、息継ぎの度に湿った吐息が肌にかかった。

薄目を開け、見つめ合ったまま舌先をちろちろと合わせる行為が厭らしく、春歌が酸欠で真っ赤になる頃に、カミユは軽いキスを繰り返してそっと唇を解放した。

「ふ、っは……春歌……」

「ん……」

唾液で汚れた口元をそのままに、春歌はカミユにくったりと身を預けた。大きく上下する肩が息を整えようとしている事を教え、カミユは背を支えて少しの間待つ。

何も言わない春歌はとろんと表情を蕩けさせ、体温を上昇させていた。

「春歌……？ 大丈夫か」

問いかけに返事は無い。代わりにこくんと小さく頷く仕草が健気で、潤んだ瞳がカミユを見上げる。

ほうつとしたそれは許可のようなものと思った。春歌の手は力なくカミユのシャツを掴んでいる。

支えていた腕を滑らせ、柔らかな胸元へ添えても特に抵抗は無い。そこで初めて、カミユはこのまま進めてもいいという許可を得たことに、緩く息を吐き出した。

給仕用の服はカミユが与えているだけあって触り心地が良い。サイズも春歌用に作られているため、触れると体のラインがよく分かった。

衣服の上から胸を弄ると、衣擦れの音が鳴る。ごそごそとするそれが恥ずかしいのか、唇を噛み締めて耐える様子を眺めながらカミユは感触を堪能する。

「んっ、ふ……っ、」

押し殺す声が腕の中で微かに響く。見下ろした春歌は耳までを赤く染め、目を伏せたままカミユの動きを追いかけていた。

どくんどくと鼓動が高鳴っているのが手のひらに伝わり、無意識に喉が上下する。

膝丈のスカートは動きやすいからか春歌がよく好んで着ていた。腿をなぞり上げ、じらすように布をたくし上げて行く。内側の柔らかいところへ直接触れ

ると、敏感になつてゐるのか春歌は小さく息を飲んだ。

「あ、カミュせんば……」

「声を抑えるなよ？」

つつ、と辿らせる指は中心へと近づく。カミュの言いつけには答えなかった春歌はただじつと身を硬くしていた。

触れた下着はまだ乾いた感触を伝えた。確かめるようになぞると奥の形が分かる。ゆつくりと中へ侵入させ、恥丘を越えて秘所に触れると羞恥を堪えるような細かい音がすぐ近くで聞こえた。

「少し脚を開け、このまま触れても気持ちよくないだろう？」

「っ、は、恥ずかし……です……」

「お前の為を思つて言つてゐる、いいな？」

耳元で囁くようにカミュは指示を出す。春歌はこういうときにはつきりと言葉を口にされるのを嫌がった。

しかし言葉の通り、カミュが無理にはしたくないというのを分かっているため、渋りながらもおずおずと従う。この駆け引きのようなやり取りがカミュの楽しみのひとつでもあった。

膝の上に乗った不安定な体を支えてやると、春歌は軽く脚を広げた。触れやすくなつた瞬間に中指を奥へ滑らせる。

びく、と肩を竦めた春歌を伺いつつ、陰唇をかき分けて入り口へたどり着くと、そこは思つた通りに温かいぬめりで覆われていた。

「っひ、う……！ やっ……」

くち、と下着の奥で小さく鳴った音に春歌は嫌々と首を振った。構わずに水音を響かせながら馴染ませるように蜜を塗りこめる。

たつぷりと掬い上げ、熱が移った指先で包皮に覆われたそこに触れると、従順に腰が小刻みに跳ねた。何度か往復を繰り返して、下着にも春歌が零した蜜が染みを広げる。

隠された陰核を指先で挟み、上下に擦り上げたり指の腹でこねると、気持ちいいのか春歌はカミュにもたれ掛かり息を荒くする。

胸も同時にまさぐれば、気づけばカミュの手はぐつしよりと厭らしく濡れていた。抱きかかえた体は熱を持ってひどく熱い。

こうしてゆつくり与えてやれば快楽にひたひたと沈めてやることができると、カミュは先ほどまで考えていた今日の主旨をふと思い返した。

「春歌……一度下りろ、そこへ横になれ」

「んっ、は、はい……」

引き抜いた手は外気に晒されすうと冷えた。自分が汚したそれを見たくないのか春歌は頑なに目を伏せている。

言われた通りに、力なくベッドへ移った春歌は簡単にシーツへ身をうずめた。見下ろすとまんざらでもない表情をして浅い呼吸を繰り返している。

期待されているような、そんな顔を眺めればふつふつと湧き上がるものを強く感じたが、カミュはくつたりとした春歌の足元に膝を突いた。

「……？ せんば……」

「力を抜いていろ、暴れるなよ？」

「ふえ……っ、……！」

ぐい、とおもむろに広げた脚の間にカミュは押し入る。捲れ上がったスカートの中から下着が晒され、中心部分には大きな染みができていた。

先ほど自分がそうさせたのだと思うと頭に血が昇る。腿をわし掴み、恥ず

かしい箇所がよく見える体制にさせれば、これから何をされるのか理解したらしい春歌は慌てた声を上げる。

「だ、だめ……っ！ 待つてくださ、それはっ」

「ここが気持ち良いのだろう？ 奉仕してやる、お前は俺に任せていればよい」

「待つ……！ お、お風呂入ってないので、汚いですから……！」

「別に構わん、余計なことは気にするな」

予想通りに春歌は手足をばたつかせて抵抗した。しかしもう間に割って入っているためカミュは気にも留めず体を下げる。

押し広げたそこへ顔を寄せると厭らしい香りが鼻腔を掠め、誘われるように鼻を埋めてすん、と息を吸えば春歌の悲鳴が聞こえた。

「つや、カミュ先輩……っ！ 待つて、だめですっ……！」

「ん………」

どうせ風呂に入っていようと嫌がるのは変わらないだろう、と思いつつカミュは押しのけようとしてくる手を気にせず口を開く。

下着ごととはむりと秘所全体を含み、舌で形をなぞれば小さな手は長い髪をくしやりと握り込む。

唾液を塗り込み、水分を含ませれば張り付いた布地が性器をくつきりと浮かび上がらせた。目の前にしたそれにごくりと喉が鳴る。

小刻みに震えている腿を宥めるように摩り、そつと下着をずらせば、ひくひくと息づく春歌の可愛らしいそこがカミュへと晒された。

「っ、春歌……んっ、ふ……」

「ん……っ！ ひう……！」

指先で触れていた時と同じように、舌で奥を探る。ひだの間へねじ込み、粘

膜へたどり着くと感じた熱に情欲が増した。

こんなに潤ませて、身を震わせている彼女にちりちりとした感覚が脳を走る。じゅる、と啜り飲み込むと不思議な満足感が浮かんだ。

湿った生地が不快に思え、刺激を与えながら引き下ろすと大した抵抗もなく春歌もそれに従った。どうやらもう諦めたらしく、隠すものもなく完全に全てが露わにされてもじつとシートに頬を埋めて瞼をきつく閉ざしている。

何処も彼処も柔らかくて夢中で味わう。舌の感触が気持ち良いのだろう、ぶくりとした赤い粒をねっとりとし舐めてやれば、とろとろと蜜を零しながら春歌は甘い声を上げてベッドの上で悶えていた。

「か、かみゆせんぱつ、そこばっかりだめ……！」

「っふ、ん……気持ちいいか？ 達しそうならば言え」

「あつ、あ、もうっ……！」

小刻みに腰が震え、小さなつま先がぴんと張る。それを合図に、すっかり露出した陰核を吸い上げれば春歌は呆気なく達してしまった。

濡れそぼつたそこから口を離すと、唾液と蜜が混じり合ったものが糸を引く。汚れた口元を拭い、荒く呼吸を繰り返している春歌を見下ろせば、目尻をとろんと下げてカミュをじつと見つめていた。

真つ赤に上気した頬と、涙の溜まった瞳が揺れる。ぎしりと覆い被さり、汗ばんだ前髪を除けてやると瞬きをした拍子に小さな水滴がつつと伝う。

羞恥と、快楽が混ざり合ったような表情があまりに愛らしく、思わずふつと笑ってしまえば、軽く達しただけの春歌はカミュを見上げて不満そうな声を上げた。

「お風呂も入っていないのに、やっぱりだめです……」

「別に構わんと言っただろう、俺は気にせん」

「わたしが気になります……」

「あれだけ気持ちよさそうにしておいて、随分な言い様だな」

からかうように言う春歌は益々顔を赤くして唇を噛む。ふいと逸らされてしまった視線を追うように涙の跡へ口づけ、拗ねているような仕草に、カミユはわざとらしく口元を緩めてみせた。

「カミユせんばい、面白がっていますね……」

「そのようなことはない、と言つてもお前は信じぬだろう？」

「うう……先輩の、いじわる……」

「何だ、ひどい言い草だな。ならば、どうかご機嫌を直してくださいませんか？」

春歌様

よしよし、と子供をあやすように頬をくすぐる。ちらりと瞳を向けたあと、

春歌はもぞりと身を振って乱れていたスカートを直した。

「不満そうですね？ 何か仰りたいことでも？」

「不満、というか……もう少し優しくしていただけると、うれしいです……」

珍しくはつきりとした物言いにカミユは軽く目を見開く。乱暴にした覚えはないが、春歌の言っていることはそういう意味では無いのだろう。

事実、春歌が恥ずかしいと思う言葉や行為をわざと仕掛ける事は、カミユの楽しみのひとつでもあるのは否定できない。本気で嫌だと拒絶されれば勿論止めるが、だいたい事で春歌がそうしたことには無かった。

だからこそ甘えて、楽しんでしまっている。今、きつとそういうことを春歌は言っているのだろうと思う。

優しく、と言われてできない事は無い。ならば、とカミユは表情を緩める。

「でしたら、こちらの私でおりましたよう。貴女の望むまま、優しくいたしますので」

「え、あの、そういうわけでは……」

「構いません、私がそうしたいのです。さあ、続きをさせていただけますか？」

春歌様

少し困惑したらしい春歌の頬を引き上げ、至近距離で囁く。鼻先をすりりと合わせ、目を細めて見つめると春歌の表情はすぐにぽうつと無防備なものに変わった。

春歌曰く、カミユの色素の薄い睫毛と瞳が綺麗だと見惚れてしまつらしい。こんな顔を見られるのは自分だけの特権だと、カミユは薄く開かれた唇を静かに深く重ねた。

濃厚なキスを交わしながら、衣服を解いていく。このまま抱き合っても心地良いが、やはり直接肌に触れたい欲求が加速する。

よく知ったワンピースは脱がせるのに手間取ることはなかった。既に脱がされていた下着を上だけ着けているのがかえって恥ずかしいらしく、抵抗もなく素肌が晒される。

これから汗をかくため、カミユもシャツをベッドに放れば、見上げてきていた春歌は気まずそうに視線を逸らした。

「春歌様、どうなさいました？」

「い、いえ……何でもないです」

「そうですか。では、触れても？」

カミユには春歌が何を考えているのか手に取るようにわかる。しかし今日ばかりはあえて口にせず、気づかないふりをしてただ微笑みを浮かべる。

心許なく胸元を隠していた春歌は、こくと小さく頷いた。細い腕を取り、

片方はシートへ、もう片手はぎゅつと繋いで縫いとめる。

カミュが顔を伏せると、先に肌へ落ちた髪にびくりと肩が跳ねた。粟立つ様子を眺め、鎖骨へ唇を落として行けば春歌は咄嗟に口元を手で隠す。

「我慢なさらないでください、その方がきつと気持ちがいいですから」

「んっ、でも……ひゃっ」

「どうか恥ずかしがらず、可愛らしいお声をお聞かせください……」

脇腹をなぞるとくすぐったいような声が上がる。滑らかな感触を手のひらで堪能しつつ、顔を胸元まで下げれば息を飲む音が聞こえた。

谷間に舌を滑らせ、ふにふにと乳房を弄ぶ。まだ柔らかい先端は可愛らしく色づいていた。

何度か指先で擦つてやると反応して上向きそれを口に含む。唇で挟んだり、軽く吸い上げて刺激を続けければ、春歌は身悶えるようにカミュの手をきつく握りしめた。

「つふ、あ……んっ」

「気持ちいいですか？ こちらも触れて欲しそうに揺れて……」

「やっ、言わないでください……」

胸へ愛撫を続けると春歌の脚がもじもじとすり合わされる。感じやすい身体は桃色に染まり、甘い香りが漂っていた。

先ほど触れていた所為もあってか、春歌はすんなりとそこへ侵入した手を許した。案の定ぬるりとしたもので覆われている秘所を何度か撫で、奥へと指を差し入れる。

鳴った水音の後、すぐにカミュの中指は中枢まで飲み込まれた。きつく締め付けてくる内部はたった二本でも、馴染ませてやらないと狭い。

「っ、……！」

「辛いですか、少し我慢してください……」

「んっ、平気、です……っ」

ぬるぬると壁を擦り上げながら深くまで抽送をくり返す。時折苦しげな声も上がったが、慣れてくると春歌は小さく腰を跳ねさせた。

表情をじつと窺いながら指を増やして行く。熱い粘膜が物欲しげに受動を始めた頃、夢中で感覚を集中させていた自身の息が上がっていることに気づき、カミュはゆつくりと春歌から手を離す。

「春歌様……よろしいですか……？」

「ふえ、は、はい……」

「ありがとうございます。では、力を抜いていてください」

あくまで平静を装ってカミュは言葉をかける。一つずつ丁寧に進めているからか、春歌も気持ちよさそうに身を任せていた。

しかし、確信を許されたこの状況でいつまで自身のペースを保てるのかカミュはわからなかった。そうすると決めたからには最後まで貫きたいが、果たして本能的な行為で態度を崩せず居られるのか。

ベルトを外す音がやけに耳に着く。いつもより過敏になってしまっている所為なのかもしれない。片手では上手いかず、じいとしみ上げてくる春歌の視線に気にしない振りをして、衣服を寛げる。

もう既に上向いていた自身は下着に染みを作っていた。思ったより余裕の無さが浮き彫りになり、落ち着けるように深く息を吐く。

「せんばい……？」

「っ、……どうかいたしましたか？ 春歌様」

「いえ……あの、なんでもないです……」

手間取っているようなカミュに春歌が不思議そうな顔をする。ここで悟られてはあまりに格好がつかないと、唇を落とせば春歌は静かにそれへ応えた。

何度も食む行為を続けながら、下肢を合わせる。ぴくりと反応した春歌はキスの最中に覚悟したように目を閉じた。

「んっ、ん……っふ、……」

見えない入り口を、手で支えた陰茎で探り当てる。互いが零したものでぐちぐちと音だけが響き、何度も滑っては敏感な箇所を擦られた春歌が身を振った。

先端の割れ目を粒が掠める刺激が気持ちいいが、早く中へ入りたいと熱が集まる。やつと見つけたそこへ、ぐつと腰を押し込んだ瞬間、カミュは思わず春歌から口を離してしまった。

「つく、う……」

「ひあ……っ！　せ、せんばい、大丈夫ですか……？」

「っ、ああ……」

挿入の心地よさに歯を食いしばって耐える。すぐ近くでそれを見ていたらしい春歌は、つらそうなカミュに心配そうな声を上げた。

春歌の熱に包み込まれている快感が下肢を襲い、しばらくじつとしているとおずおずといった様子で小さな手がカミュの頬に触れた。

伏せてしまっていた目を向ける。すると春歌は優しく髪を避けて、潤んだ瞳を揺らめかせる。

「あの、クリスザード……我慢なくていいので、いっぱいしてください……」

「春歌、何を……」

「その……わたしも、とっても気持ちがいいので、やっぱり優しくしなくても平気です……」

小さな声で告げて、春歌は両手を伸ばした。力なくカミュの頭を抱え、キスが注がれるのにカミュも震える背を支えて応える。

身体を繋げたまま、しばらくそうして睦み合ってから、そっと離れた春歌は幸せそうにふにやりと笑った。

「……何を笑う」

「ふふ、クリスザード、目がとろんとして、気持ちよさそうです」

「っ、そうか……」

「はい……きやつ」

春歌の言葉にカミュはシートへ顔を伏せた。熱い顔は確かめなくとも赤いことは明確で、見られたいわけが無く細い肩口へ頬を寄せる。

大きなカミュに覆いかぶさられている春歌は重そうだったが、今度は春歌の方がよしとあやすようにカミュの頭を撫でた。

気を持ち直すのにしばらくかかってしまい、やつとカミュが顔を上げる頃、表情は眉間に皺を寄せたいつものそれに戻っていた。

「クリスザード……」

「もう良い、お前もこちらの俺が好きだと言っていたしな」

「え……はい、先輩は、先輩のままだがわたしは好きです」

「そうか。では遠慮なく行くぞ、良いな？」

最後の問いに、春歌ははいと答えた。ふつとカミュの口元が緩んだのは無意識で、優しいそれに春歌は手を伸ばす。

ぎゅつと手を絡ませ、言われた通りにカミュは腰を引いて行く。しばらく馴

染ませたおかげで痛みは無く、そのまま抽送を始めると甲高い声がこぼれ出す。快楽を逃がす為、浅く呼吸をするとその度に声が漏れそうになった。肌がぶつかる音が寝室に響き、何度も奥を叩かれ春歌は次第に泣き叫ぶように喘ぐ。時折痙攣する膣内は何度も軽く達しているらしく、上がる声も力が無くなっていく。

ゆつくりと感触を確かめるようにざらついた壁を擦ると、子犬のように鳴いた春歌は涙を流して悲願する。

「も、もお、だめ……っ！ もっとされたら、おかしくなっちゃ……」

「っは、く……構わん、俺がそうさせているのだ、いくらでも乱れてしまえ」

「ら、らめっ、クリス……っ！」

名前を呼ばれる前にごっんと突き刺す。舌を出して喘いだ春歌に口づけ、必死に呼吸をしている口内をかき回した。ぐちゃぐちゃと濡れた音が響き渡るのがたまらなく本能を煽る。

声も抑えられず、薄く笑っている春歌にはもう見えていないはずと、カミユも閉じられない口からぼたぼたと涎を落とした。

気持ちよくて余計な事は何も考えられなくなる。汗で滑る身体を擦り付け、動物のように腰を揺すりただひたすらに果てを目指した。

「あっ、あ……っ！」

「っぐ、は、あっ……春歌……っ！」

カミユの下腹部が痙攣し、射精を促す律動を早める。達しているらしい春歌はよくわからない言葉を発しながら喉を引きつらせていた。

びゆる、と奥から溢れ出るものを残らず注ぐよう、何度も打ち付けて子宮へとぶちまける。びくびくと震えてしまうのを止められず、恍惚の表情で精液

を吐き出している最中、春歌はじつとカミユを見つめていた。

「あ……あつい、おなか、いっぱい出て……」

「っは、はあ……ふ……春歌……」

「んう……クリスザード……」

息を整える中、虚ろな瞳で春歌はカミユを呼ぶ。愛おしそうに腹へ触れる仕草と、まだきゆうきゆうと締め付けてくる温かさに、もう少しこのままで居たいとカミユはそつとシーツに寝そべり小さな身体を抱き寄せた。

繋がったまま離れようとしないうちに、春歌は一瞬困惑の色を見せたが、胸に閉じ込めるとすぐにうとうとと瞼を下ろす。

疲れてしまった彼女が眠りに落ちるまで、カミユはひどく甘い香りに意識を委ねていた。

「お目覚めですか、お嬢様」

ふと、開いた瞼にぼんやりと視線を彷徨わせっていると、すぐ近くで声が聞こえて春歌は瞬きをする。

目の前にあった金色の糸がカミユの長い髪だとその時にやっと気づき、目線だけを上げれば気だるげなカミユと目が合った。

「ふあ……おはよう、ごらいまふ……」

「呂律が回っていないぞ、寝ぼけているのか？」

低い声はいつものカミユだった。先程の声は夢だったのかと、まだぼうっとする頭でじつと見つめていると、大きな手が伸びてくる。

指先で目尻を擦られると少しひりひりと痛んだ。どうしてだろう、と考えるがよくわからない。

そのまま髪を梳かれると心地よさにまたうとうととするが、もぞりと動いた拍子に布団から覗いた肩がすうと冷えた。

体を包んでいるものが暖かいせいで、寒いと感じてしまう。掠れた声が喉から漏れ、温もりを求めて潜り込もうとするとカミュがそれを手伝った。

「寒いのか？ もつとこちらへ来い、そんな格好をしているからだ」

「ふえ……？」

ふとカミュの手が肩に触れる。ぐいと引き寄せられると距離が縮まった。

直接肌に感じた感触にあれ、と思い、そこで初めて自分の体を確認すると、春歌は上から下まで何も身につけてはいないことに気付いた。

「え……あれ、わたし、服……」

「起きたようだが、寝ぼけているな？ 昨夜あのまま眠っただろう、お前の服ならその辺に落ちていると思うが」

「えっ、あれ、わわっ！」

カミュの淡々とした声に脳が覚醒を始める。咄嗟に胸元を隠すと頭上で小さく息を吐く音が聞こえた。

よく見るとカミュも素肌でベッドに寝ているようで、互いの格好を自覚した途端にかあつと血が昇る。

「慣れんやつだな、まったく」

「す、すみません……」

徐々に昨夜のことを思い出し、益々顔が熱くなる。意識してしまわないようにカミュへ背を向け、途中で確認した時計は午前八時前を指していた。

まだ幾分か早いことにはつとめる。しかし普段ならばもう洗濯が終わっているくらいの時間だった。

随分寝こけてしまったのだと知り、春歌はカミュに見えないようもぞもぞと身を起こして周囲を見回す。

「何をしている？」

「えと、服を……洗濯をしないといけません」

「別に後でも構わんだろう、まだ眠いなら寝ている。俺ももう少し休む」

「でも……」

渋る春歌にカミュは眉間へ皺を寄せ、おもむろに布団を引いた。隠すものを取られた所為でひゃあとおかしな声が漏れる。

慌てて手繰り寄せようとするが、カミュの力には敵う筈もなく春歌はすぐにまた布団の中へと潜り込んだ。

「カミュ先輩っ！ なにを……」

「もう少し寝ていると言っている。お前は今日仕事も無いだろう」

「そ、そうですね……」

不機嫌そうなカミュはほとんど目を閉じていた。寝起きがあまり良く無いカミュはきつとまだ眠いのだろう。枕に頬を埋めたまま、低く喉を鳴らし起き上がる気配も無い。

しかしもう目が覚めてしまった春歌は、そんなカミュを物珍しげに眺めていた。

「カミュ先輩はお仕事があるのですか？」

「……午後から取材と……事務所で打ち合わせがある……」

「でしたら、その前にお昼とアレキサンダーのお散歩に行きますよね？ わた

しやつぱり、お洗濯をします」

布団の中から顔を出し告げると、カミユはちらりと目を細めて春歌を見た。それからまた瞼を下ろしてしまつが、それ以上は何も言わない。

乱れた金色の髪もそのままに、ひとつ深い息を吐いたカミユは、もう起きているのかもわからなかった。

「……カミユ先輩？ 朝食も軽く取られますよね、あと一時間くらいしたら準備をして呼びに来ます。それまでゆつくりしててください」

「……ん……」

微かに聞こえた掠れた声は二応返事だったのか、それきりカミユは穏やかに胸を上下させて眠ってしまった。

まるで子供のような姿に思わずふふ、と笑ってしまう。最初に聞こえた柔らかな声も、寝ぼけていたせいなのかもしれない。

手を伸ばし、ふわふわと顔にかかる長い髪をそつと除けてあげてから、捲れた布団を直して春歌はそそくさとベッドを後にした。

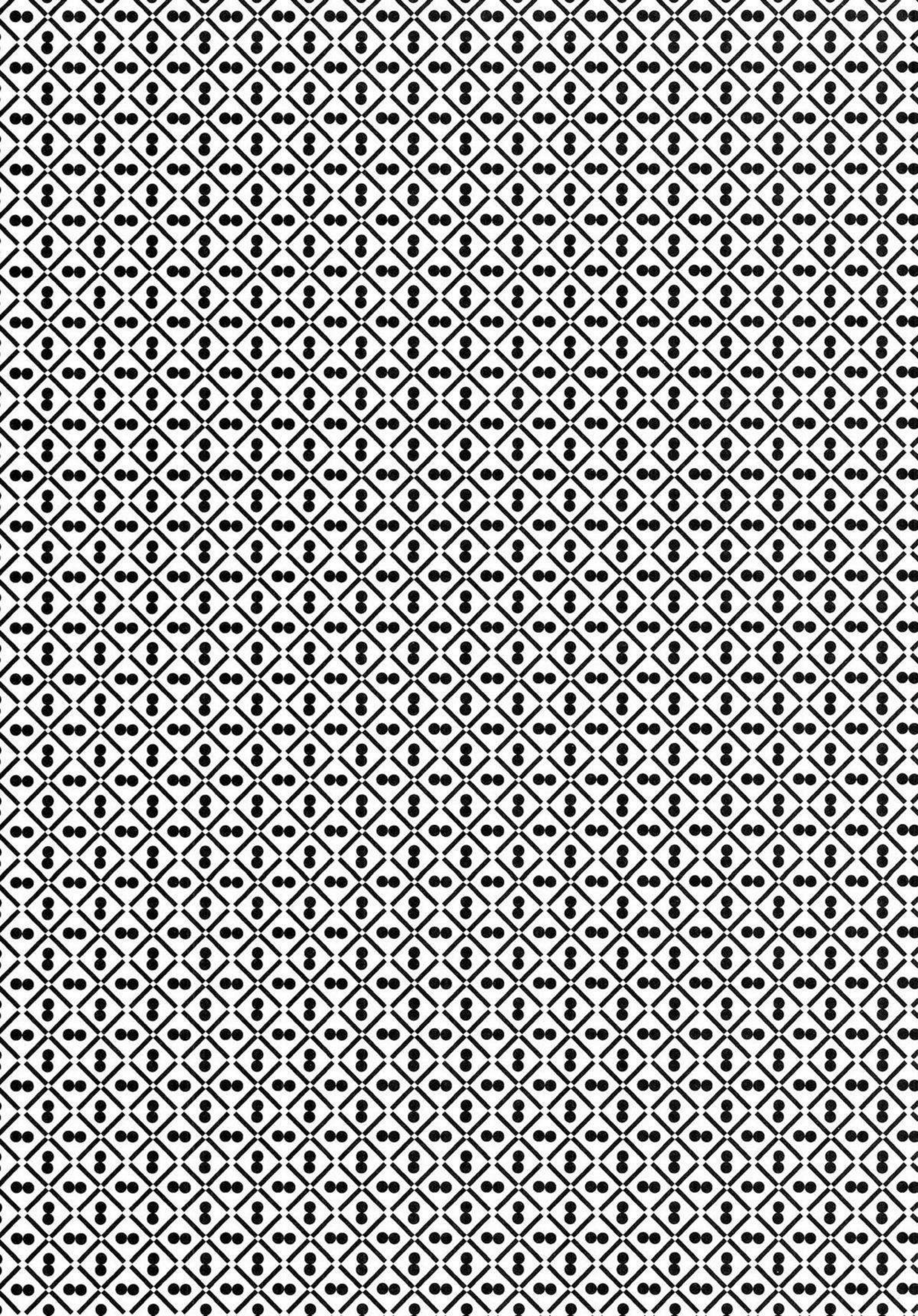
昨日、完璧に振る舞っていたカミユからは想像できない無防備さは珍しくもあった。きつとカミユはそんな事は無いと言うだろうけれど、もしかしたら気を張って疲れてしまったのかな、と思う。

カミユは特別な日だからと言っていた。でも、あれだけ贅沢に甘えさせてもらったのだから、今日は変わりにたくさん甘えてほしい。

おいしいご飯を作つて、お気に入りの紅茶を淹れて。

いつもと同じことくらいしかできないけれど、せめて朝食はとびきり甘くしてあげよう。

そんな風に今日一日のことを考えながら、春歌は先程のカミユを思い出してひとりで頬を緩ませた。





UTANO PRINCE SAMA
CAMUS HARUKA FANBOOK
SPRING 2015

Candytest

二〇一五年三月十五日 発行

発行者

うさぎ G.A@SEVENTHSEA

蒔蕨ゆい pez@konnyoku_yukko

連絡先

蒔蕨ゆい
blow_up_in1966@msn.com

印刷

株式会社しるし出版

●本書は「うたの☆プリンスさまっ♪」の二次創作誌であり
原作者及び公式関係各社には一切関係ありません。

●無断転載・転用・オークションへの出品、インターネット上の
アップロードを固くお断り致します。
オークションへの出品を確認された場合落札後定価にて回収され
て頂きます。ご了承下さい。

キャンディ・タフト

CANDY
DUFT

